

4 教育研究組織

目標群

2003年度自己点検・評価項目に設定した目標

1. 歴史経過の確認に基づく3学科体制への円滑な移行
2. サテライトキャンパスの有効利用

2005年度以降に設定した目標

1. 文学部3学科体制の円滑的運営と将来像の継続的検討
2. 文学研究科の改編と大学院教育の充実
3. サテライトキャンパスの有効利用

進捗状況報告

2007年3月、文学部改組の設置完成を迎えるにあたり、2006年度は、学部委員会を通じて入学試験における専修の分属方法について再検討を行うとともに、カリキュラム委員会を通じて、4年間のカリキュラム運営の総点検を開始することとなった。このうち入学試験では、学部委員会における検討と教授会での議を経て、2008年度入試から、文化歴史学科と文学言語学科について、専修を単位として募集、合格判定を行うことにより、従来の教養教育の重視に加えて、受験生の専門教育に対する高い動機付けをも受け止めることができる体制を整備することとなった。カリキュラムに関しては、2008年4月に設置が予定されている聖和キャンパス（仮称）教育学部の編成との関係性を考慮しつつ、2008年に向けて、主としてカリキュラム委員会で検討を継続することとなった。また、2003年2月に整備した人事規程に基づき、昇任、採用を含む複数件の任用人事を確実に実施した。

文学研究科では、文学部改組の設置完成にあわせて、従来の10専攻を3専攻14領域（後期課程は13領域）に改編すべく、将来構想委員会で検討を重ね、研究科委員会の議を経て、2006年5月26日に文部科学省に届け出をおこなった。これにより2007年4月から、新たな組織が発足することとなった。なお、その円滑な運営と充実のため、大学院問題検討委員会および将来構想委員会を通じて、2007年度も検討を継続する予定である。

大阪梅田キャンパス（サテライトキャンパス）の文学研究科の利用については、教育学専攻学校教育学コース（2007年度からは総合心理科学専攻学校教育学領域）を中心として、安定的な実績を重ねつつある。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

1) 文学部の改革について

2007年度のカリキュラム改革については、とりわけ人文演習科目や総合科目等の教養教育の部分に重点を置いて再検討が行われている。学科や専修の専門教育との間に連関を持たせながら、文学部全体の見地からなされる教育の必要性については、2003年度の学部改編以来、これを重視する基本姿勢が変わるところはない。文学部全体の理念や方針に関わる部分は学部委員会が責任を果たし、具体的個別的な検討は、カリキュラム委員会や、カリキュラム委員会のもとに設置された各種科目の運営委員会が担当することになっている。バランスのとれた改革、改善を目指して持続的な努力を重ねているところである。また、2008年度に向けた文化歴史学科の入試の手直しについては、専修分属を1年生から実現するにしても、同時に専門性への過度の特化は回避すべきであるとの理解は共有されており、文学部全体の教育を優重にする方針に揺らぎはない。

2) 大学院文学研究科における大阪梅田キャンパスの利用は、総合心理科学専攻学校教育学領域をもっぱらとして行われており、次のような実績を掲げておきたい。

延べ7科目 履修者41人（2006年度春学期）
延べ7科目 履修者35人（2006年度秋学期）
延べ8科目 履修者57人（2007年度春学期）

総合心理科学専攻学校教育学領域在籍者（2007年度、2年生は教育学専攻学校教育学コース）

前期課程1年生 2名
2年生 6名

教育学専攻学校教育学コース在籍者（2006年度）

前期課程1年生 4名
2年生 3名

教育学専攻学校教育学コース在籍者（2005年度）

前期課程1年生 3名
2年生 5名

学内第三者評価

（文学部・文学研究科 共通）

学科改革が意欲的に行われていると評価できる。

新体制の中身はまだ形成中であるとしても、2005年度の「改善の具体的方策」にも述べられているように、その改革の目的が達成されているか、総括的な検証が必要と思われ、特にその評価のための基準を明確に示すことが求められている。

また、それぞれの学科の事情の中で個別的なカリキュラムの改革や入試制度の変更が進められるのではなく、学部教育・研究科教育全体の目的に沿った改革が継続されるための制度的な工夫について記述されることが望ましい。大阪梅田キャンパスの利用については、具体的な実績を提示する必要がある。